

ロバート・バトラー博士の死を悼む

府川哲夫

Tetsuo Fukawa

福祉未来研究所代表

ロバート・バトラー博士は自らProductive Agingを見事に実践された方であった。私とバトラー博士の接点はそれ程密ではなかったが、それ程短いものでもなかった。そして、主に伊部英男 ILC-Japan 理事長(2000年12月20日に他界)を通してのものであった。1992年11月に伊部理事長がNYのハッチ基金で講演された。当時私は国立公衆衛生院に勤務していたが、一行に加わってNYに行き、バトラー博士にお目にかかる機会を得た。バトラー博士の伊部理事長を見る目は彼の人物を雄弁に語っていた。その後、GSA(米国老年学会)でバトラー博士のセッションに出たことも何度かあった。2005年11月にはバトラー夫人の葬儀がNY All Souls Unitarian Churchで行われ、私は会場の外の間でバトラー博士のスピーチを聞く機会があった。なかなか感動的な場面で、しばしその場を立ち去りがたかった。

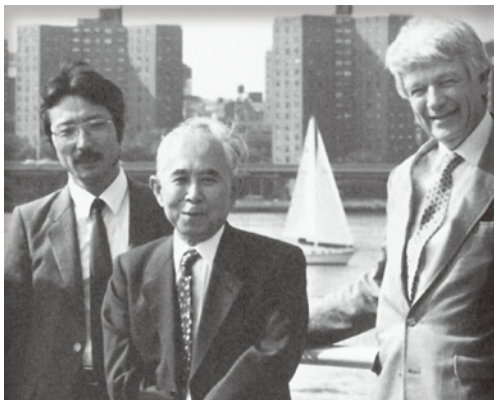
日本では学校教育で個性を抑えて平均化させる教育を長らくやってきた。その結果かどうか、国民の個性の幅が狭いように思う。そして日本国民は概して流行になびきやすい。どんなことがあっても自分の考えを変えない人があまりにも少ないということは、多様性の薄さにつながる。日本では権限と責任が分離している。政治の悪さは、やはり最終的には国民の責任に帰着する。本音と建前を使い分け、建前だけで表向きの説明を押し通すことは accountability

を果たしているとは言わない。このような状況は日本のジャーナリズムの薄さの証拠でもある。日本の「規制緩和」も「政治改革」も「国際貢献」もスローガンに過ぎない。形だけ、うわべだけの国が世界から尊敬されることはない。

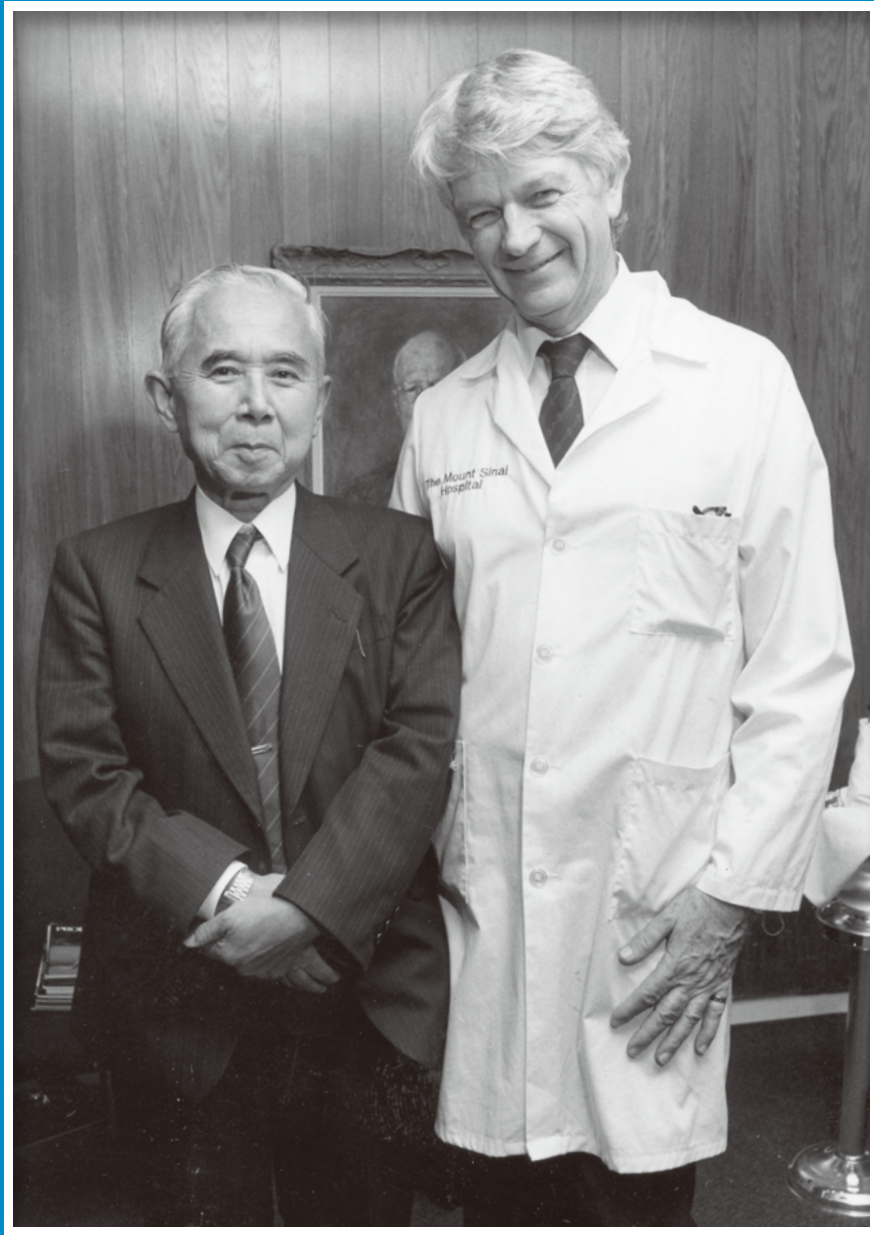
あいまいな言語を持つ情緒的な国で、効率だけを追求した経済システムを持っている国が本当の意味で先進国になるにはどうすればよいのか。この間の答えを見出すことが伊部理事長のライフワークであった。伊部理事長は発想の人であり、国民皆保険の実現をはじめ厚生行政に多大な貢献をした人であるが、その関心は社会保障にとどまらず多岐に亘った。私は直接には晩年の伊部理事長しか知らないが、個人の自立を訴え、日本が国家として自立すべきことを熱く説いていた。その言葉は本質をついたものが多く、新鮮であった。

このような伊部理事長をバトラー博士は敬愛してやまなかった。バトラー博士が伊部理事長を最初のパートナーとしてILC活動を開始した所以である。バトラー博士の語り口調は人の心をひきつけ、説得的でとても魅力的な人物であった。高齢化で世界の先頭を切っている日本にとって、バトラー博士の提唱した Productive Agingは

極めて重要な指針の1つである。ロバート・バトラー博士のご冥福を心よりお祈りしたい。



1992年、ニューヨークでの
博士(右端)、伊部理事長(中央)、筆者



初代ILC伊部理事長とバトラー博士